

日記史料に現れる近世後期農村住人の定期市利用

— 武州多摩郡中藤村の指田藤詮を中心に —

渡 邊 英 明

- I はじめに
- II 所沢六斎市の概要と周辺地域との関係
 - (1) 所沢六斎市の成立と市日の変化
 - (2) 所沢六斎市の市場景観と店舗形態
 - (3) 所沢六斎市とその周辺地域との関係
- III 『指田日記』に現れる定期市利用
- IV 同時期の日記史料にみる人々と定期市との関わり
 - (1) 『公私日記』にみる鈴木平九郎と定期市との関わり
 - (2) 『星野半右衛門日記』にみる星野半右衛門と定期市との関わり
- V おわりに

I. はじめに

近世日本の定期市の多くは、短冊型地割が連続する市町で開催された¹⁾。関東地方の市町では、町家住人が共同で定期市の管理にあたり²⁾、個々の町家住人は、市日の商人差配や見世賃徴収を通じて、日常的に定期市に関与した³⁾。また、市日に輻輳する市場商人や購買者も、定期市存立の重要な要素であった。市場商人には、近江商人や香具師商人、長吏など組織された商人のほか⁴⁾、農間余業として余剰作物や特産品を市に出す零細な出店者も存在した⁵⁾。

このように、近世定期市には、商人・購買者・市の管理者など、様々な人々が関与して

いたが、近年では、市町住人や市場商人に関する研究が進展している⁶⁾。一方で、購買者や零細規模の販売者に関しては、相対的に分析が手薄であった⁷⁾。その要因として、近世定期市研究で主に用いられてきた、市場争論や市の新設・再興に関する史料が、彼らの活動の詳細をほとんど記録していないことが挙げられる。近世の定期市における購買者や零細販売者の活動を捉えるには、彼らの個人的な記録を用いるなど、新たな分析が必要であろう。

また、市町住人や市場商人に視点を向けた近年の研究にあつては、市日とそれ以外の日とを合わせた彼らの活動実態に関する分析は、あまり進んでいない。しかし、近世中期以降の関東地方では、多くの市町で常設店舗が増加し、市町は市日以外にも商業機能を果たしていた。つまり、この段階の市町では、市日以外にも商取引が行われていたことを想定する必要がある。市町での商業活動と市日との関係を考察するには、具体的な活動日程を記録した史料を用いることが一定の有効性を有すると考える。

このような観点から、本稿では、定期市で活動した個々人の記録であり、かつ活動日程を記す史料として、日記に注目したい。日記には商業活動の日程が明記されるため、市町における市日と市日以外の商業機能の差異を検討する材料となり得よう⁸⁾。

キーワード：江戸時代、定期市、所沢町、日記、武蔵国

もちろん、近世定期市に関する先行研究でも、このような日記史料の利点を生かした分析は散見できる。たとえば、岡村は、武州川越町の商人である榎本氏の「万之覚」を用い、17世紀後期に榎本氏のもとで活動した商人たちが、市日に従って複数の定期市を巡回（市掛行動）したことを示した⁹⁾。また、経済史学の谷本は、武州入間郡の縞木綿商人である細瀨氏の定期市での活動を「市日記」（1859～1873年）から分析した¹⁰⁾。岡村や谷本の分析は、定期市に関与した人々のうち、商人の記録を用いた成果といえる。一方で、近世定期市における市町住人や購買者など、商人以外の人々の活動については、日記を用いた分析があまり進んでいない。しかし、中世や近現代を対象とした定期市研究では、これらの人々の日記を用いた研究が蓄積されている。たとえば、藤田は『多聞院日記』をもとに、16世紀の奈良町住人による市での購買活動を検討した¹¹⁾。また、民俗学の山本は、千葉県大多喜六斎市の農家出店者の日記（1960～1980年代）から、市取引の実態と、生計維持活動としての市取引の位置づけを検討した¹²⁾。藤田や山本の成果を踏まえると、近世の商人以外の人々が作成した日記についても、これと同様の分析を行うことで、彼らと定期市との関わりについて新たな知見を得られる可能性があると考えられる。

ただし、日記は作成者の個人的な記録であり、その分析から得られた内容が、どの程度一般化できるかは慎重に考える必要がある。本稿では、日記以外の史料に現れる定期市・市町の動向を踏まえるとともに、同時期における複数の人物の日記を比較することで¹³⁾、個人的記録の相対的な位置づけを考えたい¹⁴⁾。

本稿では19世紀中期に武州多摩郡中藤村（図1）の指田藤詮が記した『指田日記』に注目し、分析を試みる¹⁵⁾。近世の多摩地方一帯には、多くの定期市が存在した。指田もこれを利用した人物の一人であり、『指田日記』

には、市日における彼の活動に関する記述が際立って多くみられる¹⁶⁾。また、『指田日記』と同時期に、中藤村周辺では複数の日記史料が著され¹⁷⁾、これらから当時の住人の定期市利用に関する記述を確認できる。これに加え、『指田日記』の著者が最も頻繁に利用した所沢六斎市については、史料が比較的豊富に残っていることから、歴史地理学や近世史、経済史等の幅広い分野で研究が蓄積されてきた¹⁸⁾。そのため、日記に現れる定期市利用の位置づけを、市町側の史料から考察することも可能である。

以上を踏まえ、本稿では次のように論を進めたい。まずⅡでは、指田が主に利用した所沢六斎市の概要とその周辺地域との関係について述べる。Ⅲでは『指田日記』の記事を分析し、指田藤詮の定期市利用のあり方を検討する。そしてⅣでは、『指田日記』と他の日記とを比較することで、各日記著者の定期市への関わり方にどのような特色がみられるか考察する。以上の検討を通して、近世所沢六斎市周辺の住人たちが定期市とどのように関わっていたのかを明らかにしたい。

Ⅱ. 所沢六斎市の概要と周辺地域との関係

(1) 所沢六斎市の成立と市日の変化

所沢は狭山丘陵の北東麓に位置し、田無方面、府中方面、川越方面への道、および柳瀬川上流から狭山丘陵を越えて青梅方面に抜ける道¹⁹⁾が分岐する交通の要衝であった²⁰⁾（図1）。17世紀には、所沢の町場は東川の河谷に沿って東西に形成され²¹⁾、西側から順に上町・上仲町・下仲町・下町の個別町が展開していた（図2）。定期市はこの四町で開催され、市神は上町および仲町に祀られていたという²²⁾。また、明治期には短冊型地割が下町の外側にも展開し、東川の対岸には裏町が形成された²³⁾。

所沢一帯は、武蔵野台地にあっても特に地下水位が低く、通常は20m以上も掘らねば水

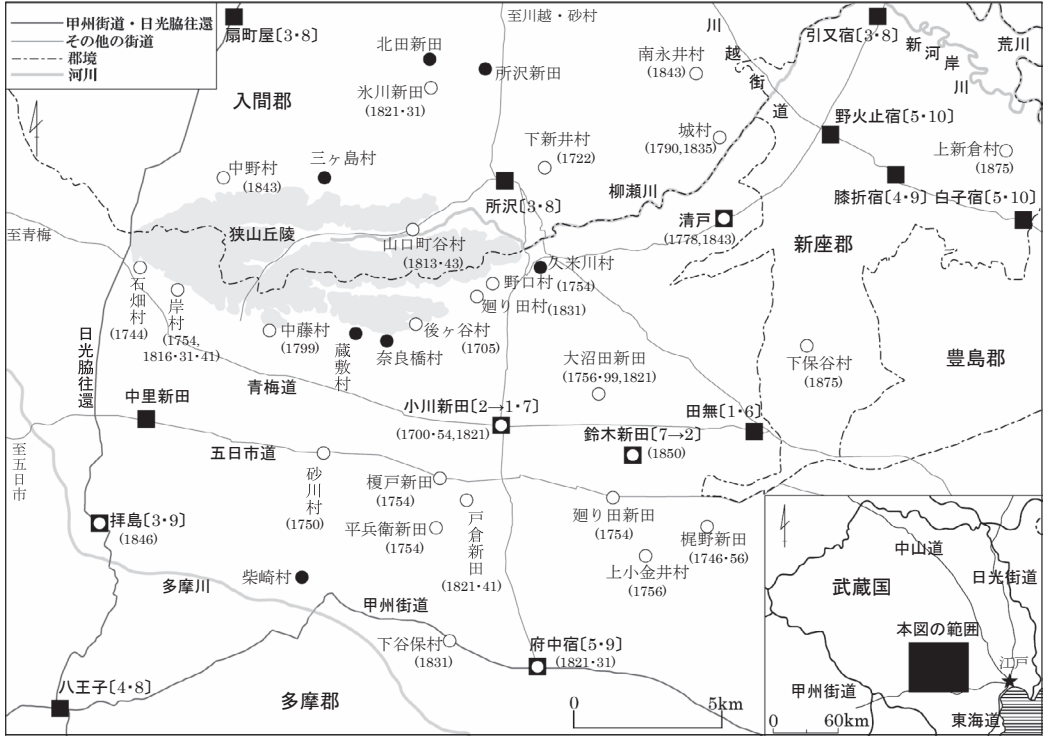


図1 江戸時代の所沢六斎市とその交易圏

■定期市〔市日〕 ○所沢を最寄定期市として挙げる村(史料年代) ●その他本文で取り上げた村

図中の「→」は近世後期の市日変化を表す。たとえば、小川新田の〔2→1・7〕は、市日が2の日から1・7の日に変化したことを示す。

史料年代は表1による。原図は1909年測図5万分の1地形図「東京南西部」「東京北西部」「八王子」「青梅」。



図2 明治前期における所沢町の地割形態と個別町

点線は個別町の境界を示す。所沢市役所(資産税課)所蔵の地籍図(明治前期)より作成

が出ない。しかし、宙水が東川沿いに存在したため、所沢町の住人は2 m程度の井戸から良質の水が得られたという²⁴⁾。町内の共同井戸は、街道の中央に3ヵ所あり、通りの中央を貫く溝に余水が流された²⁵⁾。このように、所沢の町場は、街道の交差する交通の結節点であったこと、および宙水の存在という複合的な条件により発達したと考えられる。所沢は、17世紀には幕領・旗本相給であったが、その後、旗本知行地が川越藩領に編入され、18世紀には所沢村全体が幕領となった²⁶⁾。

所沢には、1639年の市祭文が残ることから、この時期までに定期市が成立していたことが分かる²⁷⁾。また、菊地は1630年の所沢村検地帳に記載された所沢村の反当収穫量が周辺農村よりも高いことを指摘し、これを定期市開催の利潤に対する「かぶせ盛」であると考察した²⁸⁾。そして杉森は、17世紀の関東地方で検地を通して、このような市開催と引き換えに高率の税を負担する町場が確定されたこと、およびそれを画期として個々の町場住人を主体とする近世的な定期市が成立したことを指摘した²⁹⁾。以上から、所沢でも、1630年の検地で在来の定期市が公認され、それを契機に個々の町場住人による商人差配と見世賃徴収の仕組みが形成されたことが想定できよう。

所沢の市は、近世前期には三齋市であったといわれる³⁰⁾。しかし、1679年の伊奈・五日市間の市場争論史料が、所沢の市日を3・8と記録していることから³¹⁾、所沢の定期市は、遅くとも1670年代までには六齋市としての体裁を整えていたことになる。所沢の市日を3・8とする記録は、その後には作成された1702年「河越御領分明細記」や、1705年後ヶ谷村明細帳でも確認でき、所沢の六齋市としての市日はそのまま定着したものと考えられる³²⁾。

(2) 所沢六齋市の市場景観と店舗形態

次に、所沢六齋市の売場構成と取引商品に

ついて、1770年の「所沢村御請証文之事」をもとに検討したい。本史料は、町内での市日巡回や売場構成のあり方が窺える史料として、先行研究でも参照されてきた³³⁾。

【史料1】³⁴⁾

(前略) 且又村内毎月六齋之市三・八之日二而所を六所江替市相立、鯛・小鯉・鯖・鯰等之塩物・干物之類、木綿・古着・古布団并古着古椀其外古道具江戸二而一切売捌不申者山方田舎へ売候、品々川越御城下町江仕入二罷越右在郷者共へ商仕候、在郷所々より雑穀等持出し相互ニ交易売買、殊之外群集仕賑候得共以所々助成に罷成候程之義ハ無御座候、且表通り罷有候者ハ自分家之表を商人貸シ遣候得者、少々宛世話料之錢差置其外在郷宿休息又者中食之節湯茶等ヲ給候二付式文三文つゝ茂心持次第差置、例年共是等之助成計り二而御座候 (後略)

本史料は、所沢村が、飢饉の折に夫食拝借を管轄代官所に出願した証文の一節である。引用箇所の冒頭部分には、「村内毎月六齋の市三八の日にて所を六所へ替え市相立」という記述がみられる。これにより、近世所沢では上町・上仲町・下仲町・下町の4か町を6地区に分け、市日ごとに1地区ずつが輪番で市を立てたことが分かる。近世の関東の市町内における市日巡回は、3地区に月2回ずつの市日を割り振る場合が多いが³⁵⁾、所沢のような6地区での市日巡回も、武州草加宿³⁶⁾や上州桐生³⁷⁾などの類例を確認することができる³⁸⁾。これらのうち、桐生の市は、近世後期に絹取引の一大拠点として、関東地方で最大級の規模を呈した³⁹⁾。桐生と類似した6地区での市日巡回は、所沢六齋市が1770年までに大きく発展していたことを窺わせる。

【史料1】では、所沢六齋市の出店形態に関わる記述も確認できる。すなわち、「且つ表通

り罷り有り候者は自分家の表を商人貸し遣わし候」という記述から、市が開催される表通りの住人が「自分家の表」を商人に貸していたことが分かる⁴⁰⁾。さらに、別の史料から、近世の所沢六齋市に中見世が存在したことも確認できる。たとえば、1815年の織物取引をめぐる証文には、「中見世にては嶋^(島)買い請け致さず候」という記述があり⁴¹⁾、当時の所沢六齋市に中見世が存在したことが分かる。中見世は通りの中央に設置された市見世であった⁴²⁾。したがって、近世後期の所沢六齋市においては、個々の屋敷主が管理する屋敷前の見世と、通りの中央の中見世とが並立していたものと考えられる⁴³⁾。これに関して、近代に著された『武蔵野歴史地理』には、「中央の井戸と井戸の余水を流す溝（是は道路の中央を縦に貫いて居った）とを境にして市は道路の両側に立つた。つまり道の左側に相向つて二列、右側に相向つて二列合せて四列の店が並んだ」とある⁴⁴⁾。つまり、近代の所沢六齋市は、通りの中央を流れる用水路の両脇に中見世を1列ずつ、通り沿いの屋敷前に南北1列ずつ、計4列の売場から構成されていた。『武蔵野歴史地理』に現れる近代所沢の市場景観は、少なくとも19世紀前期まで遡ることができよう。

【史料1】は、所沢六齋市の取引品目についても記録しており、川越城下で仕入れた塩魚や干物、古着、古布団、古道具、あるいは「在郷所々」から持ち込まれた雑穀等を挙げている。「在郷所々」は、所沢六齋市の交易圏を形成する所沢周辺の農村を示すものと思われる。このように、1770年頃の所沢六齋市は、川越城下町経由で流通する商品や周辺村々の作物などを交易する場であった。

所沢六齋市の取引商品に関する記録は、【史料1】のほかにも散見される。たとえば、1759年10月8日、13日の所沢における米・大麦の市相場を、代官に報告した史料が存在する⁴⁵⁾。これにより、当該期の所沢六齋市で

米・大麦が取引されていたことが分かる。また、城村の「万歳日記帳」（1835～1836年）でも所沢六齋市で取引された商品の品目を確認することができる⁴⁶⁾。「万歳日記帳」には、1835年の正月初市から1836年の正月初市までの間の米・小麦・大豆・稗などの市相場や、蚕相場（1835年8月27日条）が記録されている。また、紙類や油、砂糖などの相場が高騰した際にはその旨が記されている。さらに、幕末から近代の所沢六齋市で盛んに行われた綿織物取引は、1815年時点でも、一定の展開をみせていた⁴⁷⁾。そして、先述のように、18世紀後期の所沢六齋市では古着・古布団・古道具等も取引されていた⁴⁸⁾。

このように、近世後期の所沢六齋市では、綿織物に加えて、食品や日用品、あるいは蚕や紙などの特産品の取引も盛んであった。

(3) 所沢六齋市とその周辺地域との関係

近世の所沢六齋市の交易圏は、村明細帳や先行研究から把握できる⁴⁹⁾。表1に、村明細帳から所沢を最寄定期市としていたことが明らかとなった村名とその史料年代を示した。当時の所沢は交通の結節点となっていたことから、所沢六齋市には周辺地域から多くの人々が訪れた。筆者が村明細帳等を分析した結果、所沢を最寄定期市としていた村は確認し得るだけでも27村存在したことが明らかとなった（表1）。その分布は、武蔵野台地や狭山丘陵外縁部に目立ち、19世紀には甲州街道沿いの府中宿や下谷保村、日光脇往還沿いの拝島村など遠方の宿村に及んだ（図1）。それらの宿村は、所沢から直線距離で4里半から5里（約18～20km）あり、徒歩交通を時速4kmと想定した場合、両者の往復には9～10時間を要したと考えられる。このような遠方の定期市利用はⅢで後述する『指田日記』にも現れ、近世後期にはしばしば行われたとみられる。

また、伊藤が検討した1845年の嘆願書は、

表1 所沢を最寄定期市として記録した村（1700～1850年）

提出村(五十音順)	年代	資料名	所蔵ないしは出典
石畑村	1744.4.	差出シ明細帳下書	個人蔵文書
後ヶ谷村	1705.4.	武蔵国多摩郡山口領後ヶ谷村諸色覚書上帳	国文学研究資料館史料館所蔵杉本文書73
榎戸・平兵衛新田	1754.11.	村柄様子書上帳控	『国分寺市史料集（I）』92-95頁
大沼田新田	1756.10.	〔村明細帳〕	『小平市史料集第一集』93-97頁
	1799.12.	村中様子品々書上帳	『小平市史料集第一集』99-102頁
	1821.6.	村差出明細帳	『小平市史料集第一集』104-108頁
小川新田(のち本村) 小川村	1700.9.	武蔵国多摩郡小川新田村指出帳	『小平市史料集第一集』4-11頁
	1754.11.	村柄様子明細書	『小平市史料集第一集』35-39頁
	1821.5.	村差出明細書上帳	『小平市史料集第一集』58-63頁
梶野新田	1746.1.	村指出帳	『小金井市誌Ⅲ』165-169頁
	1756.3.	武州多摩郡梶野新田・上小金井村・上小金井新田村鑑様子大概書上帳	『小金井市誌Ⅲ』176-181頁
上清戸村	1778.2.	村差出シ明細書上帳	村野勝司家文書44 (K)
	1843.2.	村差出シ明細書上帳	村野勝司家文書354 (K)
上小金井村	1756.3.	武州多摩郡梶野新田・上小金井村・上小金井新田村鑑様子大概書上帳	『小金井市誌Ⅲ』170-175頁
岸村	1754.12.	〔村明細帳〕	荒田孚家文書439-2 (M)
	1816.6.	村柄様子明細帳	荒田孚家文書465 (M)
	1831.7.	村方明細書上帳	荒田孚家文書467-1 (M)
	1841.2.	〔村明細帳〕	荒田孚家文書469 (M)
下新井村	1722.8.	武州入間郡下新井村差出シ帳	『所沢市史近世史料Ⅱ』425-428頁
下谷保村	1831.1.	村差出銘細書上帳	『国立市史中巻』796-798頁
城村	1790.3.	明細村差出帳	『所沢市史近世史料Ⅱ』69-70頁
	1835.6.	明細書上帳	『所沢市史近世史料Ⅱ』69-70頁
鈴木新田	1850.8.	村差出明細書上帳	『小平市史料集第一集』131-136頁
砂川村	1750.9.	村差出明細帳	『立川市史下巻』220頁
戸倉新田	1821.11.	村差出明細書上帳	『国分寺市史料集（I）』65-67頁
	1841.2.	村方様子明細書上帳	『国分寺市史料集（I）』67-68頁
中藤村	1799.7.	品々御尋書上ヶ帳下書	『武蔵村山市史資料編近世』73-81頁
中野村	1843.7.	村差出明細帳	川口美代子家文書768 (I)
野口村	1754.11.	村柄様子銘細書上帳	『東村山市史8』179-183頁
拝島村	1846.3.	村差出明細書上帳	普明寺文書（昭島市教育委員会マイクロフィルム）
氷川新田	1821.4.	村差出明細帳	『所沢市史近世史料Ⅱ』611頁
	1831.1.	村明細帳	岩岡又四郎家文書2994 (T)
府中新宿	1821.8.	村差出明細帳	『府中新宿菊池家文書』1-7頁
	1831.1.	村差出明細帳	『府中新宿菊池家文書』7-15頁
南永井村	1843.	村明細書上帳	『所沢市史近世史料Ⅱ』235-236頁
廻り田新田	1754.10.	村柄様子委細帳	『東村山市史8』176-179頁
廻り田村	1831.7.	村明細書上帳下書	『東村山市史8』194-196頁
山口町谷村	1813.3.	村明細書上帳	岩岡又四郎家文書558 (T)
	1843.7.	村明細帳	岩岡又四郎家文書（埼玉県立文書館CH85-3）

注：マイクロフィルムで所蔵されている史料については、「所蔵ないしは出典」の欄に、その所蔵先を示す記号（I）・（K）・（M）・（T）を示した。各記号に対応する所蔵先は以下の通りである。（I）：入間市博物館，（K）：清瀬市郷土博物館，（M）：武蔵村山市立歴史民俗資料館，（T）：所沢市生涯学習推進センター。

所沢村組合・府中宿組合・拝島村組合が幕府代官所に対して、市日の所沢町で横行していた博奕取締りよう求めたものである⁵⁰⁾。所沢村組合は所沢を中心とする48村、拝島村組合と府中宿組合は両宿村を中心とする各25村から成り、その分布は、前述の村明細帳の分析から導かれた交易圏の広がりとも重なる⁵¹⁾。以上を踏まえると、所沢周辺地域の村々は、所沢町の風紀の乱れに強い影響を受けるほどまでに、所沢六斎市を日常的に利用していたと考えられよう。

Ⅲ. 『指田日記』に現れる定期市利用

『指田日記』は、多摩郡中藤村の陰陽師である指田藤詮が1834～1871年に記した日記で、近世の陰陽師研究でも盛んに用いられてきた⁵²⁾。『指田日記』の市町に関する記事は、ほとんどが「所沢に行く」、「八王子に行く」などと、極めて簡略に記されるのみである。ただし、市日に合わせた移動が大半であり、定期市の利用が主目的であったと想定できる⁵³⁾。定期市に出掛けた記事は、日記の開始年である1834年から、自身が没する1871年まで毎年確認でき、図3ではその日数を年別に

示した⁵⁴⁾。日記に現れる定期市利用は、1870年の22回（いずれも所沢）が最多であるが、1850年代には所沢および八王子の六斎市の利用に関する記録が年5回程度の年が続いている。このことは、指田が1850年代後半にほとんど定期市を利用しなかったことを示す可能性もあるが、当該期の指田にとって、定期市利用がごく日常的なことであったがゆえに、あえて市利用を日記に記さなかった可能性も考えられよう。

『指田日記』に現れる定期市は、所沢と八王子にほぼ限られる。1799年の中藤村「品々御尋書上ヶ帳下書」によると、指田が居住した中藤村の最寄定期市は所沢で、距離は2里程（約8km）であった（表1）。また、中藤村から西方約2kmにある岸村の明細帳をみると、岸村と八王子との距離は3里半（約14km）となっている（表1）。このことから、中藤村と八王子との距離は4里（約16km）程度であったといえる。指田は、陰陽師という特殊な職業柄、遠方に出掛ける機会が比較的多かった可能性はあるが、所沢や八王子への移動がほぼ両町の市日に限られていたことから、これらは定期市に関係した移動とみなせ

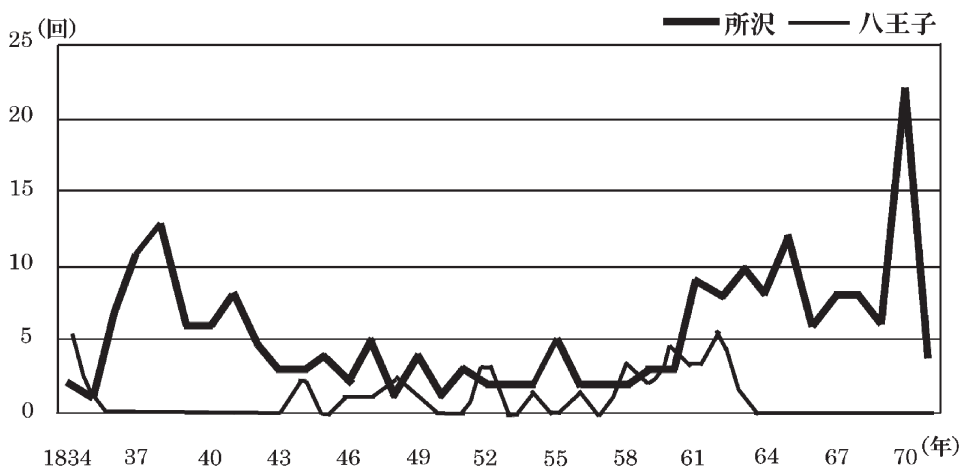


図3 『指田日記』にみる市日の市町訪問日数（1834～1871年）

出典：注15)。

よう。

八王子六斎市は、市日を4・8とし、17世紀後期には穀物・太物・肴・塩などの取引を中心とする市として、既に一定の発展を遂げていた。そして、八王子六斎市は18世紀以降、織物取引が飛躍的に拡大し、関東地方を代表する絹市となった⁵⁵⁾。八王子六斎市の交易圏は広範囲におよび、たとえば入間郡山口町谷村(図1)や、相模国の村々も八王子を最寄定期市として挙げている⁵⁶⁾。八王子六斎市の利用をめぐるのは、『指田日記』の1834年5月14日条に「妻を八王子に買物に行かしむ」とあり、また、指田自身も60歳代半ばを迎えた1862年に、八王子六斎市の利用を年間5回も記録している。このことから、女性や高齢者も往復8里(約32km)という距離を移動して定期市を利用していたと考えられる。ただし、指田自身が八王子六斎市に赴いた記録は1863年10月14日条が最後で、それ以降は所沢六斎市の利用記録のみ確認できる。これ

は、指田が70歳近くという高齢になり、往復30km以上の移動が体力的に難しくなったためと推測される。それでも指田は、77歳で没する直前まで片道2里(約8km)程度の所沢六斎市を頻繁に利用していた。なお、『指田日記』では、中藤村から所沢への経路について、「予、東隣哲蔵と所沢に行き問万と酒店に行く、帰路山口金乗院に立ち寄り酒後冷麵の馳走あり」(1839年6月3日条)、あるいは「所沢に行く、(中略)帰路山口迄の内奇談言語に述べ難し」(1842年11月18日条)といった記事が確認できる。いずれも、山口(図1の山口町谷村)を経由していることから、指田が狭山丘陵を越え、現在の狭山湖の湖底を通って所沢に出掛けていたことが知られる。

それでは、指田やその近親者は、所沢や八王子でどのような取引を行ったのであろうか。表2は、『指田日記』から指田の定期市での取引内容に言及がみられる記事を抽出し、整理したものである。表2に現れる品目

表2 『指田日記』にみる市町での商品取引(1838~1870年)

年月日	定期市	記事内容
1838.3.13.	所沢	所沢に行き近代真疑録十五巻を求む
1839.5.12.	所沢	奈良橋に桑を取る、所沢の市、桑一駄の代二貫四百文位
1840.3.8.	所沢	所沢に行き桑苗七十五本を求め来る
1840.10.18.	所沢	所沢に行き石碑を注文す
1845.10.13.	所沢	所沢にて宗寿の小柄を求む
1845.12.28.	所沢	所沢に行き正月の買物物を調う
1857.9.23.	所沢	所沢に行き障子六本を求む
1858.9.18.	所沢	所沢に行き、藤林の作の脇差を求む
1858.12.24.	八王子	八王子に行き粟一駄を一両に九斗五升に売る、上粟八斗六升
1859.11.4.	八王子	八王子に行き孫祝儀の買物し帰路雨
1860.11.4.	八王子	八王子に行く、鎗并短刀を求む
1862.2.13.	所沢	所沢にて十文字の鎗を作らしむ
1862.10.14.	八王子	八王子に行き半弓を求む
1863.12.28.	所沢	所沢に行く、正月の事調う
1866.12.28.	所沢	所沢に行き「国史略」「南華真経」を求む
1867.6.3.	所沢	所沢に行く、繭九枚にて十八両に売る、三両受け取る
1868.7.28.	所沢	所沢に行き島田儀助の鎗、三寸穂を求む
1868.9.18.	所沢	所沢の市に行き、河内守国助の十文字鎗を求む、東馬と同道す
1869.4.18.	所沢	所沢の市中に「源流茶話」を求む
1870.2.28.	所沢	所沢に行き「古史成文」を金三分にて求む
1870.8.13.	所沢	所沢に行く、短刀二腰を求む
1870.9.13.	所沢	所沢に行き「甲陽軍艦」写本三冊を求む
1870.閏10.13.	所沢	所沢に行く、北山先生の「作文率」四巻を求む
1870.11.8.	所沢	所沢に行き懐中鉄砲を求む

出典：注15)。

は、概ね余剰作物・商品作物、武具、書物に大別できる。食品や日用品の購入記録は確認できないが、それらはその日常性ゆえに、日記に特記されなかった可能性が考えられる。

これらのうち、武具と書物は指田の個性を反映した取引品目と思われる。すなわち、短刀や槍などの武具は祈禱に用いる呪具である可能性が想起でき、史書を中心とした古書蒐集には指田の知識人としての側面が窺える⁵⁷⁾。また、『指田日記』には、1840年に所沢六斎市での桑苗の買付が、1867年には繭の売却が記されている。桑を育てて養蚕を行い、生産した繭を市に出荷して収入の一部にしていたことが考えられる。さらに、1858年の日記では、八王子六斎市における粟売却の記録も確認できる(表2)。このとき、指田が遠方の八王子六斎市を利用した理由は記されていないが、IVで検討する鈴木氏の事例を念頭に置くと、指田が所沢と八王子の粟相場を勘案し、より高値での売却が期待できる八王子を選択した可能性が考えられる。これは、複数の定期市が近接して存在する場合に、周辺地域の住民がどのように定期市を利用していたか窺える事例としても興味深い。

IV. 同時期の日記史料にみる人々と定期市との関わり

国文学研究資料館史料館は、近世武蔵国の庶民日記39点を一覧にしている⁵⁸⁾。本稿では、それらのうち、柴崎村・鈴木平九郎(豪農)の『公私日記』⁵⁹⁾、および引又宿・星野半右衛門(市町住人・宿役人)の『星野半右衛門日記』⁶⁰⁾に注目したい。鈴木や星野が、指田の住んでいた中藤村の比較的近くに居住し、これら3名の日記の記載時期も重なるためである⁶¹⁾。

(1) 『公私日記』にみる鈴木平九郎と定期市との関わり

『公私日記』は柴崎村の豪農・鈴木平九郎

が、1837～1857年に記した日記である。鈴木家は近世後期に発展した豪農で、平九郎は幕末期に村役人を務めるとともに、商業活動も幅広く手掛けた人物である。同日記に現れる鈴木商業活動や定期市との関わりは、伊藤の解説に詳しい⁶²⁾。伊藤によると、鈴木は八王子や所沢などの町場で農産物を販売し、同時に様々な物品を購入していたという。鈴木は八王子で取引の場は八王子であったが、所沢へも度々、使いを出して売買に当たらせた。また伊藤は、鈴木が『公私日記』の毎月初めの部分に、八王子・所沢・田無等の町場における諸物価を記録していることを指摘し、鈴木が近隣の商業中心地の物価動向に深い関心を有していたことを論じた。このような傾向は、『公私日記』全体を通して確認できる。

『公私日記』には、近隣の市町・定期市に関する記事が膨大にみられる。紙幅の関係ですべての記事を提示できないため、表3では、鈴木の定期市との関わりについて、比較的多彩な事例がみられる1838年の記事を抜き出した。表3からも把握できるように、鈴木は市町への関与の特徴として、自ら最寄市町に出掛けるのではなく、そこに下男や日雇を遣わしたこと、および市町への移動や物資輸送に馬を利用したことなどが挙げられる(たとえば1月18日条)。また、鈴木が市日のみならず、それ以外の日にも下男・日雇を市町に派遣し、商取引を頻繁に行ったことにも留意したい。このような鈴木は市町への関与形態を、IIIで検討した指田のものと比較すると、両者は大きく異なるといえよう。

鈴木が市日に規制されずに商取引を行い得た要因として、市町における常設店舗の発展が考えられる。杉森や多和田は、17世紀後期以降の上州や信州で、市町に常設の穀屋が成立し、それらが19世紀にかけて発達したことを明らかにした⁶³⁾。さらに多和田は、市場商業と店舗商業とが並立した近世中後期の市町では、定期市での取引を中心とする商品と、

表3 『公私日記』における鈴木家の市町との関わり（1838年）

月	日	市町	記事内容	備考
1	1	八王子	当時米相場両二五斗替、八王子相場也、銭六貫六百文、ところ餅の沙汰なし、江戸新相場北廻り米五斗六升より六斗壹升、大麦八斗替、小麦五斗替、粟八斗位、余者は二准ル、木綿綿百文二拾七八寸有	相場
1	18	八王子	伝五郎馬武疋二而八王子江米四俵払、四斗七升五合替	市日
1	19	八王子	伝五郎馬米武俵八王子江払	市日外
2	1	八王子	当時八王子米相場、上米四斗八升より下米五斗替、大麦・粟八斗替、小麦	相場
2	18	八王子	わたや無尽買もの八王子行、滝之上又衛門孫初春詠る	市日
3	23	所沢	下男横町為次郎同道二而所沢市江罷越、鍬一丁相調、同所棒屋江棒あつらへ置帰ル、昼九ツ時同所上之方口出火、十二三軒類焼之よし	市日
4	21	八王子	わたや主人相雇中嶋・井上之馬武匹相添、八王子江家根板買出し二遣ス	市日外
6	1	所沢	此節雨口続二而諸穀少シ引上ケ、所沢辺米平均四斗五升替、大麦壹石、小麦早蕎麦七斗五升位	相場
6	25	八王子	雨天続二而、一旦下落二相相候諸穀直段引戻シ、御府内米四斗八升替、八王子五斗より壹式升、其余是二准シ、木綿、塩別而追々引上ケ候やうす也	相場 市日
7	18	八王子	八王子市場江弥次郎馬便頼遣ス	市日
8	18	八王子	米四俵也弥次郎馬武駄追而八王子江売払四斗五升替	市日
9	1	八王子	当時八王子其外最寄穀相場米四斗式三升替粟七斗五升位、大麦九斗五升位小麦六斗五升位	相場
10	10	八王子	新米式俵弥次郎馬二而八王子江払大和田河原出売江売四斗二升替帰り	市日外
10	12	八王子	關藏馬二而八王子江米八斗払四斗三升替戻り馬松板式束杉皮六束買取六分板拾六間替杉皮六拾束替	市日外
10	14	八王子	弥次郎馬二而八王子より杉六分七寸九寸板壹駄引取	市日
10	15	所沢	あら屋敷〔 〕馬二而所沢江繩買出し二遣ス	市日外
11	1	八王子	孫次郎馬二而八王子江米相払、当時米四式五替今日少し弱気帰松六分板壹駄長木屋より買上口来ル十五間替	市日外
11	2	八王子	弥次郎馬二而砂川酒屋江米式俵払四之替に付昼後八王子江同断遣候処四三五替帰馬松六分板四束附込	市日外
12	24	八王子	中嶋母八王子年の市江行正月飾もの其外買もの頼遣ス	市日

出典：注59）。

常設店舗での取引を中心とする商品とが存在したことを指摘した⁶⁴⁾。そして、穀物は常設店舗が大きな役割を果たした品目であり、特に大量の物資を取引する場合には常設穀屋との関係が重要になったという⁶⁵⁾。鈴木家の取引品目は穀類が中心であり、それは馬を用いてなされた大口取引であった。『公私日記』に市日以外の日の取引が多く現れる要因として、鈴木が常設穀屋との取引を中心にしてきた可能性を指摘できよう⁶⁶⁾。

ただし、Ⅲで検討した指田は市日に穀物取引を行っており、鈴木の家との関わり方と異なっている。同じ穀物取引であっても、豪農や穀商人らの大口取引と、それ以外とでは、市町内での取引の場が異なった可能性も考えられよう。

ところで、鈴木は所沢町よりも八王子町での取引を頻繁に記録している（表3）。これは、柴崎村が所沢よりも八王子町により近接していたためと考えられる（図1）⁶⁷⁾。この

ように、鈴木家の所沢六齋市への関わりは相対的に希薄なものであったが、その一方で、『公私日記』には柴崎村の他の住人が所沢六齋市を利用したことを示す記述も確認できる。たとえば、1849年9月23日条には「小源太所沢市より帰り次第市郎右衛門掛合い詰め候約束の由」とある。この記事から、小源太という人物が所沢六齋市に出掛けていたことが分かる。図1で示したように、柴崎村は所沢六齋市の交易圏の縁辺部に位置するが、鈴木家や小源太のように、所沢六齋市を利用した人々が存在したことも明らかである。

(2) 『星野半右衛門日記』にみる星野半右衛門と定期市との関わり

『星野半右衛門日記』は、引又宿の星野半右衛門が1852～1857、および1875～1880年に著した日記である。近世の引又宿は六齋市を開催する市町であり、市日は所沢と同じ3・8であった。星野は、引又宿の宿役人を務めるとともに、後述するように市日には自らの居宅の前庭を売場として供した。同日記には、市日における他所商人の来訪の記事がしばしばみられる。たとえば1853年1月18日条には「川越商人大雪に來り、常盤屋、正木屋、中屋」とあり、引又宿の市日に川越から複数の商人が来訪したことが分かる。このうち、正木屋は「川越商人正木屋喜兵衛殿へ切地代金貳兩相渡し残らず済、但し我等庭に市六齋、定見せの商人也」（1853年1月23日条）という記事から、市日に星野家の庭先で取引を行う市場商人であったことが分かる⁶⁸⁾。星野家の庭で市商いをしたのは、川越商人ばかりではない。1853年12月29日条では、砂村の佐平次について、「八拾年已前より当所六齋市出張り煙草商ひ仕來り候処、手廻り兼候間、今市限りにて出張候義相止め候趣断りにござ候、一躰四・五拾年已前より我等庭へ出張り候」と述べている⁶⁹⁾。佐平次家は、80年前（1773年）から引又六齋市で煙草を取引し、

40～50年前（19世紀初頭）から星野家の庭で出店していたが、1853年限りで中止したようである。

また、日記には引又六齋市の景況に関する記事もしばしば現れる⁷⁰⁾。星野は、市日の商人差配により見世賃収入を得ていたことに加え、宿役人の立場からも、六齋市の運営状況を気に掛けていたとみられる。一方で、同日記には、自らが引又宿の周辺市町に出掛けたことを示す記事はほとんどない。また、所沢に関する記述も、1858年4月23日条、および同年5月12日条のみである。このうち、5月12日は所沢の市日ではない。この内容は「所沢村三上半三郎方へ掛合に行き、久米村佐藤平八殿方へも右同断、夕刻帰宅」というものであり、星野は所沢村の三上半三郎らに何らかの用事があって出掛けたと理解できる。また、4月23日は所沢町の市日であったが、「扇町谷へ嶋屋出立にて所沢へ廻り、それより八つ半頃帰宅いたし」という日記の記事から、この日、星野が扇町屋からの帰路に所沢を経由したに過ぎなかったことが分かる。このように、星野の所沢六齋市との関わりは希薄であった。その要因として、所沢六齋市と引又六齋市との市日重複を指摘できる。所沢の市日には、星野は引又宿で町家住人として商人差配を行い、さらには宿役人という立場上、六齋市の管理も担っていた。星野が所沢六齋市に出掛けた記録をほとんど残していないのは、以上述べた彼の属性に起因するところが小さくないと考えられる。

ただし、このような星野の所沢六齋市との関係が、引又宿の住人全般に当てはまるかは慎重に考える必要があろう。たとえば、幕末期から近代にかけて、所沢周辺農村で発展した綿織物生産では、引又河岸を経由して所沢に移入された木綿が原材料として用いられた⁷¹⁾。引又宿には、木綿移出を通して所沢町と日常的に取引を行っていた住人が存在した可能性も十分に考えられよう。

V. おわりに

本稿では、『指田日記』の分析を中心として、近世の武州入間郡・多摩郡における定期市と、それらをめぐる周辺地域住人の活動を検討した。日記は作成者の個人的属性を色濃く反映するため、その位置づけが問題になる。そのため、本稿では、同時期に同一市町の周辺に居住した複数の人物の日記を比較し、定期市・市町に関する他史料と併せて検討することで、各日記著者の定期市への関与にいかなる特性がみられるか考察を試みた。

『指田日記』は、武州多摩郡中藤村の指田藤詮が19世紀中期に著した日記で、市日の活動について長期的に記録している。指田は、77歳で没する直前まで片道2里程度の所沢六斎市に頻繁に出掛けた。また、『指田日記』からは、指田が余剰作物・商品作物・武具・書物などを市日に取引していたことが明らかになった。指田が行ったような市での余剰作物・商品作物の売却は、指田を含む中藤村住人が共通して行っていたものと考えられる。

指田が主に利用した所沢六斎市は、南方の武蔵野台地や狭山丘陵の外縁部に広い交易圏を有した。所沢周辺では、『指田日記』と同時期に作成された複数の日記史料が現存している。そのひとつである『公私日記』を著した柴崎村の鈴木平九郎は、豪農という属性から、最寄市町との間で大量の物資輸送を頻繁に行った。鈴木は自ら最寄市町に出掛けるのではなく、下男や日雇を派遣し、その移動や物資輸送には馬を利用した。鈴木が最寄市町で市日以外にも商業活動を行っていたことから、鈴木の実取引の場は常設店舗が中心であったと考えられる。柴崎村は所沢六斎市の交易圏の外縁部に位置していたために、鈴木の実取引の場は所沢町との関わりは相対的に小さかった。ただし、柴崎村には鈴木家以外にも、所沢六斎市を利用した人々が存在したことが、『公私日記』の記事からも確認できる。

『星野半右衛門日記』の著者は、引又六斎市の市日に自らの居宅前庭で商人差配を行った町家住人であるとともに、引又宿の宿役人を務めた人物でもあった。引又宿は、経済的にも所沢町との関係が深かったが、同日記には星野が所沢六斎市に出掛けたという記録はほとんどみられない。星野は、引又六斎市の商人差配を行い、宿の世話役を務める必要があったことから、引又六斎市と市日が重なる所沢六斎市に出掛ける機会に乏しかったと考えられる。

このように、『指田日記』・『公私日記』・『星野半右衛門日記』の各著者は、いずれも所沢六斎市の交易圏内に居住したが、彼らの所沢六斎市への関与形態は、それぞれの属性を反映していた。同時期に同一市町の周辺に居住した複数の人物の日記を比較する作業は、各日記が示す日記著者の定期市利用のあり方を捉える上で、一定の有効性があったと考えられる。

また、本稿では当該期の定期市の市日と売場の構造、および日記記事の照合を行うことにより、日記著者たちの市町との関わり方についていくつかの知見を得た。たとえば、『公私日記』の著者である鈴木は、市日以外にも近隣市町で多くの穀物取引を行っていた。この事実から、鈴木は主に市町の常設店舗で取引を行っていたと推測することができた。その一方で、『指田日記』の著者は市日に穀物取引を行っていた。所沢六斎市で穀物取引が盛んに行われたとする他史料の記述を踏まえると、指田は主に市において穀物取引を行ったことが推定できる。さらに、これらの事実は、同じ穀物取引であっても、大口取引とそれ以外とで取引の場が分化していた可能性を窺わせる。指田が主に利用した所沢六斎市では、18世紀後期の史料で主要取引品目として雑穀が現れ、19世紀中期にもそれが一定の継続をみていた可能性がある。

なお、指田や鈴木が、定期市（市町）にお

いて、購買活動と販売活動を両方行っていた点にも注意する必要がある。藤田は、中世奈良町の都市住人の日記から、市での購買活動を検討したが、そこでは販売者としての行動は見出されなかった⁷²⁾。このような藤田の研究成果を念頭に置くと、指田や鈴木のような、購買者かつ販売者という形で定期市と関与する人々は、近世以降の定期市を特徴づける要素である可能性も考えられよう⁷³⁾。また、本稿では3点の日記をもとに、近世後期の所沢六斎市周辺住人の活動形態を検討したが、近世定期市研究において日記の分析を取り入れたものは未だ少ない。そのため、本稿で得られた知見がどの程度一般化できるのかは、事例分析を蓄積しつつさらに検証を進める必要がある。今後の課題としたい。

〔付記〕

本稿作成にあたり、所沢市生涯学習推進センターの木村立彦氏をはじめ、史料を収蔵する諸機関にお世話になりました。ここに記して厚く御礼申し上げます。なお、本稿の骨子は、2010年5月の歴史地理学会大会（高崎経済大学）、および2011年9月の日本地理学会秋季学術大会（大分大学）で発表した。

〔注〕

- 1) ①桜井英治『日本中世の経済構造』岩波書店、1996、133-163頁。②伊藤裕久「中世末から近世初の町と市」（都市史研究会編『年報都市史研究4市と場』山川出版社、1996）3-16頁。③藤田裕嗣「市場と都市のあいだ—地理学からの研究視角—」（中世都市研究会編『中世都市研究1 都市空間』新人物往来社、1994）150-170頁。
- 2) ①伊藤好一『近世在方市の構造』隣人社、1967、62-63頁。②杉森玲子『近世日本の商人と都市社会』東京大学出版会、2006。
- 3) たとえば、①岡村治「近世関東における市町と市掛商人の展開」歴史地理学41-1、1999、20-31頁。②前掲2) ②。③鯨井紀子「近世関東における市場と高見世—小川村市内済絵図を中心に—」歴史地理学45-3、2003、32-46頁が挙げられる。
- 4) 前掲2) ①45-95頁。前掲2) ②157-208頁。岡田あさ子「近世関東における長吏の市商い権と旦那場」国史学177、2002、61-85頁。
- 5) 前掲2) ①。
- 6) たとえば、前掲3) ①。前掲2) ②。
- 7) 近代以降を対象とした定期市研究では、零細規模の販売者や購買者について盛んに検討されている。その例として、たとえば以下の研究が挙げられる。①石原潤『定期市の研究—機能と構造—』名古屋大学出版会、1987、344-362頁。②岡村治「越後定期市における農家出店者存立の地域的基盤—蒲原地方栗林地区を中心として—」人文地理44-4、1992、20-37頁。③番場博之「越後・三条における定期市について」市場史研究13、1994、77-92頁。④山本志乃「市稼ぎの生活誌—農家日記にみる定期市出店者の生活戦略—」日本民俗学264、2010、1-30頁。また、中世を対象とした研究成果であるが、藤田は都市住人の市での購買活動を検討している。⑤藤田裕嗣「一六世紀都市住人の活動から見た商品流通」（高橋康夫他編『日本都市史入門Ⅰ 空間』東京大学出版会、1989）、43-61頁。⑥藤田裕嗣『『多聞院日記』に現れた奈良での購買活動と流通システム』奈良大学紀要18、1990、67-81頁。しかし、近世を対象とした定期市研究では、こうした分析は進んでいない。
- 8) 本稿で分析した日記では、市日と関連した商取引が、市見世と常設店舗のどちらで行われたのかまでは明記されておらず、その点に史料的限界がある。しかし、18世紀以降の市町では市見世と常設店舗との機能分化が進み、両者間に共存関係が形成されていた。①岡村治「明治期三条町の「市」と店舗商業」歴史地理学134、1986、17-30頁。②前掲2) ②。③多和田雅保『近世信州の穀物流通と地域構造』山川出版社、2007、141-145頁。そのため、市町での商取引をめぐるのは、たとえ常設店舗での取引であっても、それが市日と関係するかどうかは検討に値する問題であると考えられる。

- 9) 前掲3) ①。
- 10) 谷本雅之『日本における在来的経済発展と織物業—市場形成と家族経済—』名古屋大学出版会, 1998, 73-119頁。
- 11) 前掲7) ⑤, ⑥。
- 12) 前掲7) ④。
- 13) 属性の異なる複数の人物の日記を比較する手法自体は, 歴史地理学において従来から用いられてきた。近世を対象とした研究に限っても, 有蘭や川口, 渡辺らの成果が挙げられる。①有蘭正一郎『近世農書の地理学的研究』古今書院, 1986, 249-274頁。②川口洋「牛痘種痘法導入期の武蔵国多摩郡における疱瘡による疾病災害」歴史地理学43-1, 2001, 47-64頁。③渡辺康代「近世城下町桑名における祭礼の変容—住民の生活文化としての祭礼へ—」歴史地理学48-4, 2006, 1-18頁。本稿では, これらの先行研究と同様の分析手法が, 近世定期市研究においても有効であることを示したい。
- 14) 岡村は武州秩父大宮郷の町役人による御用日記から, 大宮郷六斎市に関する検討を行っている。前掲3) ①。同史料は, 市町による定期市の運営管理を考察できるという点で極めて貴重な史料である。ただし, 同史料は町運営に関する公的記録であるため, 記録者の個人的な日記とは性格が異なる。本稿では, こうした公的記録の史料的価値を認識しつつも, これと個人的記録としての日記とを区別して考察を進める。
- 15) 武蔵村山市立歴史民俗資料館編『注解指田日記 上巻』武蔵村山市立歴史民俗資料館, 2005。武蔵村山市立歴史民俗資料館編『注解指田日記 下巻』武蔵村山市立歴史民俗資料館, 2006。
- 16) 『指田日記』が指田の所沢六斎市の利用を頻繁に記録していることは, 『武蔵村山市史』が既に指摘している。ただし, 『武蔵村山市史』は, 『指田日記』における定期市関連の記事を詳細に検討する, あるいは指田の定期市の利用頻度を考察するなどの作業は行っていない。武蔵村山市史編さん委員会編『武蔵村山市史通史編上』武蔵村山市, 2002, 1015頁。
- 17) 国文学研究資料館史料館編『農民の日記』名著出版, 2001。
- 18) たとえば, ①中島義一『市場集落』古今書院, 1964, 118-119頁。②前掲2) ①92頁。③田村均「明治二十年代における所沢飛白の製品改良と坪買い—織物市場の設立とその閉鎖をめぐる—」所沢市史研究17, 1994, 1-38頁。④前掲10) 73-119頁。
- 19) 山口貯水池の竣工(1934年)に伴って谷奥は湖底となり, 同街道も分断された。
- 20) 大久保は, これらの道が所沢を中心として放射状に形成されていることに注目し, この点を計画的に開拓された武蔵野台地の特色と指摘している。大久保武彦「道路網の形態学的研究」地理学評論10-11, 1934, 80-101頁。
- 21) 東川は狭山丘陵を水源とし, 所沢町の東で柳瀬川に合流する。ただし, 1941年時点では, 流水は降雨後にしかみられず, 河川沿いに水田が開かれることもなかったという。①吉村信吉「所沢町附近の地下水と聚落の発達」地理学評論17-1, 1941, 1-13頁。②吉村信吉「所沢町附近の地下水と聚落の発達(2)」地理学評論17-2, 1941, 48-62頁。
- 22) ①所沢市史編纂委員会編『所沢市史』所沢市, 1957, 255-258頁。②内野弘『所沢の歴史と地理』自家版, 1985, 75-78頁。ただし, 現時点では市神が祀られていた場所を地図上で特定できていないため, 今後の課題としたい。なお, 定期市における市神の問題は, ③中島義一「市神考」駒沢地理40, 2004, 1-12頁が詳細に整理している。
- 23) 『埼玉県営業便覧』(1902年)をみると, 東川左岸に東西に走る裏町通りが描かれており, そこに織物問屋や醤油醸造, 染物業などの業者が居住していたことが分かる。田口浪三他編『埼玉県営業便覧(復刻)』埼玉新聞社, 1977, 32-40頁。
- 24) 前掲21) ②。吉村は, 宙水域を外れると, 街道沿いでも急に人家がなくなることを報告している。
- 25) ①高橋源一郎『武蔵野歴史地理 第七冊』有峰書店, 1972, 105-106頁。中島はこのよう

- な通りの中央の水路が、東日本の市町で多くみられることを指摘している。②前掲18) ①112頁。
- 26) 近世日本では、町として支配されたのは三都をはじめとする城下町で、それ以外の多くの町場は、たとえ都市的な場でも村として支配された。所沢も公的な呼称は所沢村であった。このような町場は、在方町と総称される。渡辺浩一『近世日本の都市と民衆—住民結合と序列意識—』吉川弘文館、1999。
- 27) ①埼玉県編『新編埼玉県史 資料編16』埼玉県、1990、729-730頁。また、市祭文の作成された寛永年間(1624~1644年)を市の創始とする先行研究も複数確認できる。②前掲22) ②。③前掲18) ①118頁。
- 28) 菊地利夫『新田開発 改訂増補』古今書院、1977、360頁。
- 29) 前掲2) ②140-141頁。
- 30) ①所沢市史編さん委員会編『所沢市史 上』所沢市、1991、542頁。②前掲22) ②75-78頁。
- 31) 石川家文書8-14、1679年「市目録之次第、乍恐指上ヶ申伊奈市口上書御事」。本稿では五日市郷土館のマイクロフィルムを使用した。本史料は所沢を含む西武一帯の定期市とその市日を列挙するもので、同史料の概要は『日の出町史』で紹介されている。日の出町史編さん委員会編『日の出町史 通史編中巻』日の出町、2002、174-176頁。
- 32) ①埼玉県編『新編埼玉県史 資料編14』埼玉県、1991、92頁。②国文学研究資料館史料館所蔵杉本家文書73、1705年「武蔵国多摩郡山口領後ヶ谷村諸色覚書上帳」。
- 33) たとえば、前掲22) ②75-77頁。前掲30) ①542頁。
- 34) 所沢市史編さん委員会編『所沢市史近世史料Ⅱ』所沢市、1983、472頁。
- 35) 岡村は「関東地方の市町は大概、町並みを上中下に三区分しており、そして六斎市はその三つの町内の中で市立ての場所をローテーションしていた」と述べる。岡村治「近世初頭の六斎市展開に関する試論—市庭の風景論—」千葉県史研究2、1994、42-49頁。
- 36) 江戸時代の草加宿は、行政上9村に分割されていたが、そのうちの1村である谷古^{やこ}字村の明細帳(1725年)には「当町の義九ヶ村入会町にて町並六町にござ候、老丁に壺度づつ壺ヶ月に六度づつ市日ござ候」という記事がみられる。草加市史編さん委員会編『草加市史 資料編Ⅰ』草加市、1985、64-71頁。同史料から、草加宿では6つの地区が月に1回ずつ輪番で定期市を開催していたことが分かる。
- 37) 前掲2) ②209-252頁。
- 38) 所沢の隣接市町である小川新田では、1769~1827年まで7地区で売場を巡回させて六斎市を開催していた。小平市中央図書館編『小平市史料集 第十九集 村の生活5』小平市中央図書館、2006、284-292頁。小川新田の事例は、所沢のような6地区による輪番開催に近似した形態として興味深い。
- 39) 群馬県史編さん委員会編『群馬県史資料編9』群馬県、1977、521-525頁。
- 40) 「表」は戸外の意と捉えることができ、個々の屋敷前の空間を売場として供したものと考えられる。町場住人による屋敷前空間の売場供与(前見世)やそこでの見世賃徴収については、岡村や杉森が詳細に検討している。前掲35)。前掲2) ②81-126頁。
- 41) 前掲34) 608-609頁。
- 42) 前掲35)。前掲2) ②。
- 43) 近世所沢六斎市における中見世の商人差配については、それを明示する史料を現時点で得られておらず、その検証は今後の課題としたい。なお、関東地方の他の定期市では、中見世をめぐる、市頭による差配や、屋敷主の共同差配などの事例が報告されている。前掲35)。吉田伸之「在方市—市をめぐる人々—」(吉田伸之編『近世の身分的周縁第4巻 商いの場と社会』、吉川弘文館、2000)、235-274頁。渡邊英明「近世在方町における絵図作成の特色—武州小川を事例として—」地図47-2、2009、1-16頁。これらの事例は、所沢六斎市の中見世について考える際に参考となる。
- 44) 前掲25) ①105頁。『武蔵野歴史地理』は第

- 一冊から第四冊が1928～1932年にかけて刊行され、それ以降は長く未刊のままであったが、1971～1973年に刊行に至った。そのため、所沢一帯について記した第七冊は、1972年の刊行ながら、執筆時期は大正末期から昭和初期である。
- 45) 前掲34) 124頁。
- 46) 前掲34) 14-17頁。同史料も日記史料の範疇に含めることが可能であるが、分量は少なく短期間の記録に留まる。
- 47) 1815年に、北田新田・三ヶ島^{みかじま}村(図1)を惣代とする37村が、所沢六斎市での織物取引をめぐって所沢村名主代・縞買惣代との間で証文を交わしている。前掲10) 74頁。また、18世紀前半の村明細帳からも、所沢周辺の住人たちが農間稼として綿織物生産を行っていたことが分かる。たとえば、1722年の下新井村明細帳は、「女の稼には木綿など織り申し候」と記録している。前掲34) 425-428頁。所沢周辺の村々は、このような在来の綿織物生産を基盤としつつ、近世後期に綿織物産地として発展したと考えられる。
- 48) 『武蔵野歴史地理』には、「市に出る品物は、(中略)古鉄道具類・古綿・古足袋・古衣類・古陶器・鉞・鎌・策・籠等、農村の日常生活必需品であつた。所沢のぼろ市といふて昔から有名であつた」という記述がみられる。前掲25) ①105-106頁。古着・古布団・古道具等の取引は、19世紀以降も継続され、所沢六斎市を特徴づける要素となっていた。
- 49) 筆者は、村明細帳に現れる村々と定期市との関係について、既に論じたことがある。渡邊英明「村明細帳を用いた近世武蔵国における市場網の分析」人文地理62-2, 2010, 40-57頁。村明細帳は、村々の概況を示す史料である。したがって、村明細帳は日記史料に表れる作成者の個人的特性を考える際に客観的な基準を与えてくれるものであることから、参考資料として一定の有効性を持つと考えられる。
- 50) 前掲2) ①92頁。当時、所沢の市日毎に「所々悪もの共」が集まって博奕を行う状況が生じていたという。
- 51) これらは、1827年以降に設置された改革組合村である。
- 52) たとえば、林淳『近世陰陽道の研究』吉川弘文館、2005、269-302頁が挙げられる。陰陽師である指田は、中藤村のなかでも特異な存在であった。指田の定期市との関わり方を分析するにあたっては、このような指田の職業的特性にも注意を払いたい。
- 53) 市日以外に両町に出掛けた記録もみられるが、その数は極めて少ない。そのため、本稿ではこれらのケースを分析の対象外とし、図3でも計上しなかった。
- 54) 『指田日記』には、指田自身の定期市利用に限らず、夫人や弟子などが市に赴いた旨もしばしば記される。また、数人で連れ立って出掛けたケースもあるが、図3では、利用者・人数に関わらず、市日に市町に出掛けた日1日につき1回として計上した。
- 55) 前掲2) ①122-123頁。
- 56) 岩岡又四郎家文書558, 1813年「村明細書上帳」。本稿では所沢市生涯学習推進センターの原本コピーを使用した。青山孝慈・青山京子編『相模国村明細帳集成第一巻』岩田書院、2001、720-722頁。
- 57) 『指田日記』には、所沢町内でのこれらの物品の購入先は記録されておらず、指田が常設店舗で書物等を購入した可能性は十分に考えられる。実際、指田の書物購入について分析を行った中西は、指田の所沢での書物購入先を書店であると想定している。中西裕「幕末明治初期多摩地域豪農の書物入手法」學苑(昭和女子大学) 829, 2009, 38-65頁。ただし、指田による武具や書物の購入は、ほぼすべての場合において市日になされていた。つまり、指田のこれらの購買行動は、定期市と密接な関係にあったものと考えられる。また、書物は雨に弱く、定期市の取引品目として一般的ではないが、京都では現代でも寺社境内等で古書(和本)の露店市がみられる。幕末期の所沢六斎市でも、これと近似的な書物の露店が存在した可能性は考慮する余地があろう。
- 58) 前掲17)。

- 59) 水野祐・伊藤好一監修『鈴木平九郎「公私日記」』立川市教育委員会, 1972~1983(全20冊)。
- 60) 志木市編『志木市史別編 星野半右衛門日記』志木市, 1982。
- 61) 蔵敷村の『里正日誌』も中藤村近辺で近世後期に記された日記のひとつである。ただし, 同史料は村役人が重要書類を書き留めたもので, 公的性格が強く, 人々の日常を記録した日記史料とは性格が異なる。そのため, 本稿では『里正日誌』を分析対象から外すこととした。
- 62) 伊藤好一「天保期の地方物価の動向—南武蔵野地方を例として—」(水野祐・伊藤好一監『鈴木平九郎「公私日記」第七冊』立川市教育委員会, 1976), 110-121頁。
- 63) 前掲2) ②。前掲8) ③。
- 64) 前掲8) ③141-145頁。このような定期市と常設店舗との機能分化は, 歴史地理学において1980年代までに指摘されており(たとえば前掲8) ①), 近世史分野で近年再発見されたという位置づけも可能であろう。ただし, 市町における定期市と常設店舗との機能分化に関しては, 史料的制約もあって, 歴史地理学でも現在に至るまで目立った研究の進展はみられない。
- 65) 多和田は, 幕末期の信州小布施村の豪農である小山氏が, 大口の穀物取引に際して事前に商談を済ませたのちに, 輸送手段等の手配を進めたことを明らかにした。これは, 商品の納入以前に取引交渉を行う必要性が高まるためであるという。前掲8) ③65-109頁。
- 66) 近世中期以降の市町における穀屋の増加は, 筆者が先に検討した平沼村のように, 武蔵国でも確認できる。渡邊英明「近世中後期における二郷半領の村々と平沼六齋市—村明細帳の分析を中心に—」三郷市史研究叢のみち21, 2010, 10-36頁。所沢でも, 『埼玉県営業便覧』(1902年)で7軒の穀屋が確認できる。前掲23)。
- 67) 柴崎村の明細帳(1759年)には, 八王子市場に荷物を附送り駄賃を取る旨の記述がある一方で, 所沢に関する同様の記述は認められない。立川市教育委員会編『立川市史資料集第五集』立川市教育委員会, 1965, 2-7頁。後述するように柴崎村の住人が所沢六齋市を利用することはあったが, 彼らにとっての最寄定期市は, 主に八王子であったと考えられる。
- 68) 「定見世」は先行研究において常設店舗と位置づけられてきた。前掲3) ①。しかし, 正木屋喜兵衛の定見世は, 市日に星野の前庭に設置される市見世であった。この事例から, 定見世を常設店舗とする先行研究の理解について, 再検討すべき余地があるように思われる。
- 69) 砂村は, 川越町の近郊に位置する。
- 70) たとえば, 「雑市, よく群集いたし商人多数出候」(1853年2月29日条), 「今市は下市場にごさ候, 例年より誠不気景人出入少なく市行事柏屋弥右衛門・棒屋丈太郎右両人」(1853年12月23日条)など。
- 71) 前掲10) 92-93頁。前掲18) ③。
- 72) 前掲7) ⑤, ⑥。
- 73) 購買者かつ販売者という形での定期市への関与者は, 近代以降を対象とした定期市研究では広く観察されている。たとえば, 山本が検討した大多喜六齋市の農家出店者は, 商品を販売するとともに日用品等を購入していた。近所の人から買物を頼まれることもあったという。前掲7) ④。